

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2010年7月27日（火）

場 所：名古屋キャンパス N棟3階 社会倫理研究所会議室

報告者：Dr. Lydia Y. Jose

(Ateneo Center for Asian Studies and Department of Political Science,
School of Social Sciences, Ateneo de Manila University, Philippines)

テーマ：“Pan-Asianism, Nan’shinron and an East Asia Community:
Japan’s attempts at regionalization”

* 講演は英語



リディア・Y. ホセ教授は、フィリピンを代表する日本政治史・日比関係史の著名な研究者として知られ、中でも戦前日本の政府・民間機関・個人が東南アジア・フィリピン進出に際して提唱したアジア主義の思想について深い見識をもたれる。本報告の「汎アジア主義、南進論および東アジア共同体：日本の地域化の試み」は、歴史的に繰り返される「日本のアジア地域化の試み」という仮説の下に、大きく戦前と戦後の比較考察を試みるものであり、現代アジア地域主義の観点からもきわめて興味深い研究テーマである。したがって本報告の目的は歴史的事実や実証分析の詳述にあるのではなく、戦前日本と現代日本に“共通して”見られる「アジア地域化の試み」という仮定設定が妥当とすれば、両者の比較がどこまで可能か、可能とすれば、異なる点、類似点は何か、これらを明示的な比較手法を使って大胆に提示することによって、今後の研究の進展にむけて有益な議論や反応を賜りたいということであった。ホセ氏の主たる主張は、戦前と今日のアジア地域化を比較すれば、相違点は多々あることは認めるものの（国際政治環境の違い、地域化提唱の担い手、国際または地域機構

の有無など), 少なくとも類似点は2点ある: 第1に構成範囲・メンバー国の流動性, あいまいさ (vague), 第2に原理理念と現実の行動の間に見られるギャップ (表による比較) である。そして第1点と第2点の関連については経済優先主義を説明要因におけば説明できるというものである。類似点の第1としては, 戦前の「南洋」「大南洋」等の範囲の変遷, 対する東アジア共同体のASEAN, ASEAN+3, 東アジアの範囲の流動性が論じられた。類似点の第2の原理理念と現実の行動のギャップとしては, 戦前アジア主義の理念は平和的経済進出, 欧米植民地の自由独立 etc. であったが, 現実の日本軍政の行動は大東亜共栄圏, 経済拡張主義であったのに対し, 現代の東アジア共同体・ASEAN憲章等は民主主義と人道主義を理念に掲げるが, 現実の行動は経済利益優先主義であり, 今後も民主主義・人道主義へのコミットは弱いものに留まろうと論じられた。結論として日本の「企図」は戦前・戦後とも失敗に終わると思われると述べられた。

参加者12名の一部には旧知の研究者も若干名いたが, 多くは戦前の日本の汎アジア主義や南進論の詳細に通じたわけではなかったこともあって, コメント・質問は日本の東アジア共同体(構想)に集中した。ホセ氏の戦前の汎アジア主義・南進論に基づく議論はさすがであったが, 日本の「東アジア共同体(構想)」については, まだそれ自体が公式制度化しておらず, 現状認識および分析が不十分と思われ, 過去の歴史事実との比較手法に耐えうるかどうかの問題とされた。以下にコメントと質問の概略を記しておく。

コメント: 日本の「試み」とあるが, この比較研究の最終ゴールはどこが到達点か。東アジア共同体はまだ制度化されておらず存在していない。アメリカ抜きではありえないため日本政府の官僚は決して「東アジア共同体」について語らない。日本にとっては地域化の壁よりグローバリゼーションの方がより重要である。東アジアから中国を除けない一方, 中国と「共同体」になれる共通性も欠く。戦前イデオロギーの失敗もあって日本は「東アジア共同体」推進はできない。これに対し, ホセ教授は戦前, 戦後とも日本の地域化の試みは失敗に終わるという暫定的結論を述べた。

質問: 1) 「東アジア共同体」の概念を最初に提唱したのは誰か。マレーシアのマハティールか。2) 現代のグローバリゼーションは複雑な現象であり, 地域化との関係をどうみるか。3) 「東アジア共同体(構想)」の日本の担い手は日本財界・企業・アジア経済学者であり, その原理理念は域内自由化, 経済効率優先であり, すでに相当程度まで実質的に実現されている。現職当時の小泉首相や鳩山構想・ASEAN憲章等に依拠して東アジア共同体の理念は民主主義と人道主義だが, 現実には経済利益優先にあるとするのは単純すぎないか。

(文責: 吉川洋子)